

## オニテナガエビ養殖指導— II

與那嶺 盛 次

昨年度に引き続き、今帰仁村の養鰻業者にオニテナガエビ養殖指導を実施したので報告する。現在の養殖業者はオニテナガエビ養殖に本格的に取り組んでいる。

### 1. 養殖場根要

- (1) 養成池      660 m<sup>2</sup>池 4 面 (2 面ハウス施設) 330 m<sup>2</sup>池 1 面 (ハウス施設)
- (2) 出荷用畜養池      150 m<sup>2</sup>池 1 面 (ハウス施設)
- (3) 中間育成池      25 m<sup>2</sup>池 1 面 (ハウス施設)
- (4) 種苗生産池      6 面 (2 m × 1.6 m × 0.5 m、ハウス施設内)

### 2. 種苗生産

昭和62年4月から初めて種苗生産を実施し、7回の生産で33,000尾の稚エビを生産した。1池当りの生産稚エビの最高尾数は9,000尾であった。暖冬であったため、ハウス内のエビが多数抱卵し、この抱卵エビを使用して4回の種苗生産を実施したが、正常な幼生を得ることはできなかった。ヒーターで水温を28℃まで加熱して抱卵させた親エビから得られた幼生は、昭和63年3月現在、順調に生育している。

### 3. 養成

33,000尾の稚エビを中間育成して、8月に約9,000尾、10月に約8,000尾、12月に約16,000尾養成池(660 m<sup>2</sup>)3面に放養した。8月に放養した種苗は11月から30 gサイズのエビが約100 kgあった。また、10月に放養した種苗も昭和63年1月から30 gサイズのエビが出現した。成長は良好であった。餌料はマス用配合飼料を使用し、1日に朝と夕方の2回投餌した。

冬期にはハウス内池(660 m<sup>2</sup>池2面、330 m<sup>2</sup>池1面)で越冬させた。最低の水温は20℃前後であった。

### 4. 出荷と販売

ホテルや割烹、レストランなどに池わたし価格1 kg当り3,000円、配達価格は1 kg当り3,500円で販売した。冬期でも、地下水が豊富にあるので出荷のため水をぬいても水温23℃前後の水の入れ替えができ、エビが低水温でへい死することがないので、出荷に支障はなかった。昭和62年度の販売量は約200 kgであった。

### 5. 今後の課題

- (1) 種苗の量産
- (2) 出荷エビの取揚げ方法の検討(捕獲カゴの利用)
- (3) 出荷エビの輸送方法の検討

参考文献

沖縄県水産業改良普及所、1987：オニテナガエビ養殖の手引き

與那嶺 盛次、1987：オニテナガエビ養殖指導。昭和61年度水産業改良普及所活動実績報告書：38-44。

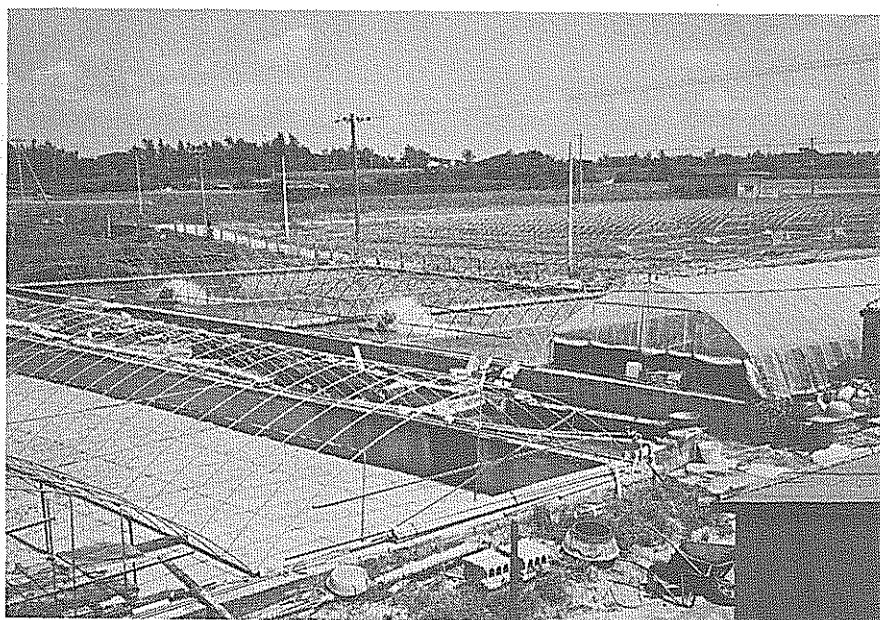


図-1 夏期の養殖場（ハウス内は種苗生産タンクと中間育成池）



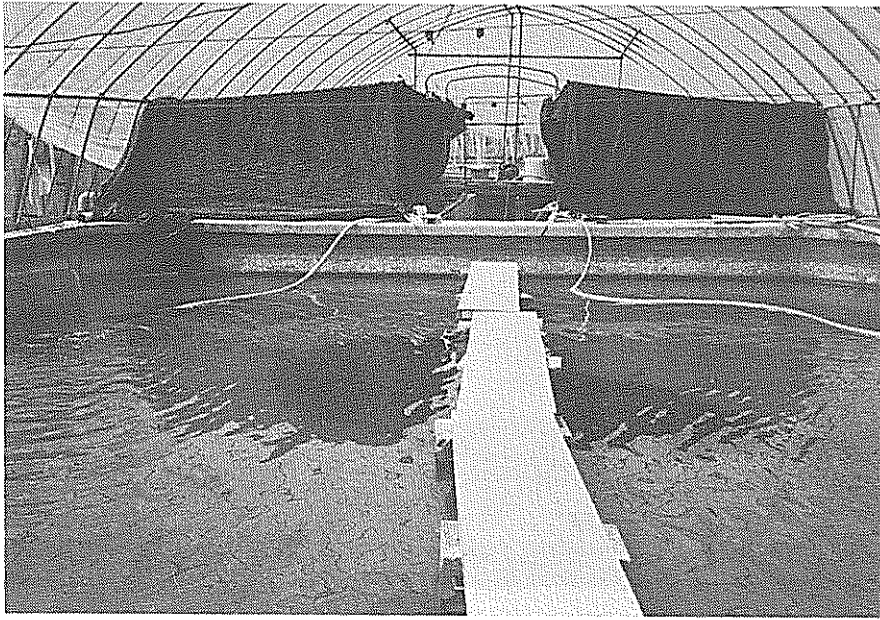
図-2 冬期の養殖場（ハウス内でエビを越冬させる）



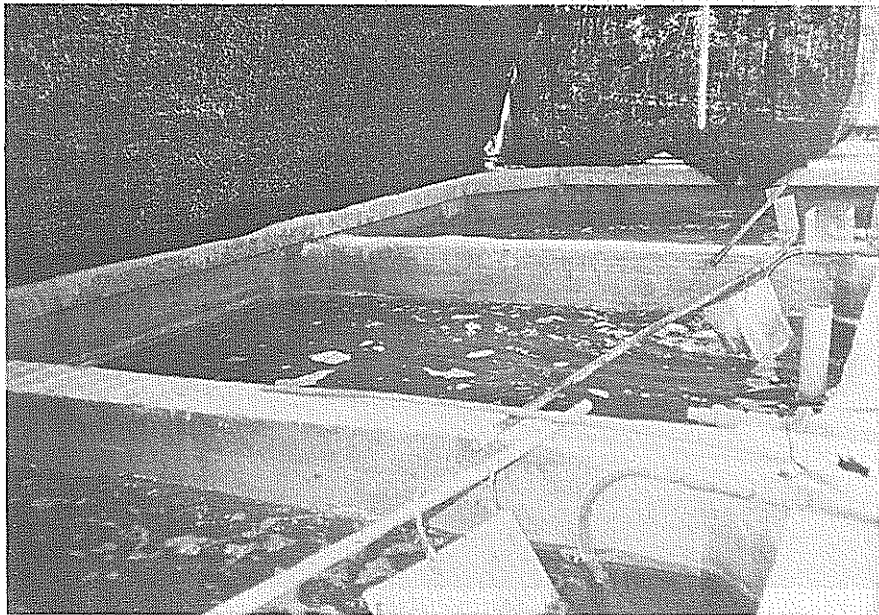
図一 3 養成池 (6.6.0 m<sup>2</sup>) の水車



図一 4 ハウス内養成池 (6.6.0 m<sup>2</sup>) の水車



図一五 ハウス内の中間育成池（前）と種苗生産池（後）



図一六 種苗生産中の種苗生産池（ $2\text{ m} \times 1.6\text{ m} \times 0.5\text{ m}$ ）



図-7 冬期の畜養ハウス池からの出荷

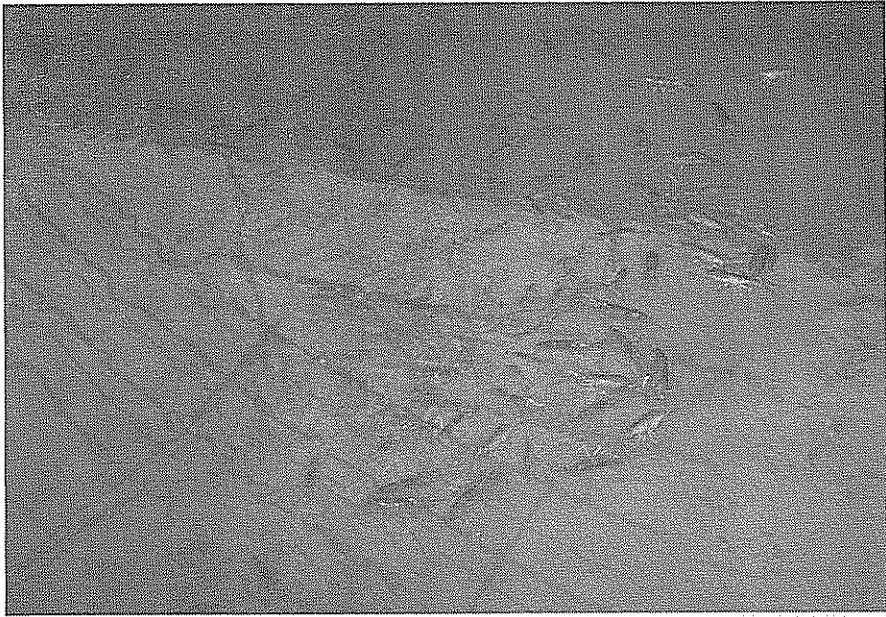


図-8 畜養ハウス池のエビ